

平成 22 年 4 月 30 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007 年～2009 年
 課題番号：19700489
 研究課題名（和文）他専攻学生を対象とした体育授業構想力と実践力を獲得するための授業プログラムの開発

研究課題名（英文） Effects of microteaching on the observation and reflection skills of students in Department of Education for Teacher Education
 研究代表者
 福ヶ迫 善彦（FUKUGASAKO YOSHIHIKO）
 愛知教育大学・教育学部・講師
 研究者番号：20398655

研究成果の概要（和文）：アンケートの分析から、学生は模擬授業の効果について肯定的に捉えていた。また、知識テストでは 5%水準で観察能力および省察能力に改善がみられた。一方で、「模擬授業の方法」「典型教材の活用」「映像コンテンツの活用」「模擬授業の機会の充足」について改善が必要であることがわかった。

研究成果の概要（英文）：Survey findings revealed that students positively viewed microteaching. The knowledge test also showed significant improvements in observation and reflection skills.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
総計	1500,000	450,000	1950,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学

キーワード：授業省察力、模擬授業、授業構想力

1. 研究開始当初の背景

学校現場では団塊の世代の大量退職を迎え、大都市圏を中心に、今後大幅な採用が必要とされる。一方、政策段階では「即戦力としての新人教員養成」「実践的な能力を持った教員の養成」「教員免許制度の見直し」「教職実践演習の新設・必修化」などが中教審を中心に論議され、実現化に向けて検討されている。現場及び政策の現状を踏まえると、教員養成大学・学部は優秀な教師の養成を質・

量ともに達成しなければならず、「採用当初から教科指導、生徒指導等を著しい支障が生じることなく実践できる資質能力」を養わせ（教員職員養成審議会，1999），存在意義を明確に示す必要がある。

小学校教員養成段階における体育科教育の位置づけは、多くの教科の 1 つであり、体育以外（国語，理科，美術など）を専攻して入学した学生（以下、「他専攻学生」とする）は、体育科教育学の授業を履修することなく

卒業するケースがある。また、教育実習でのわずかな経験のみで教師となり体育授業を行うケースもある。他専攻学生を対象とした教科教育学の授業では、より実践力の獲得を目指した内容を位置づけることが必要である。

小学校教員養成における他専攻学生を対象とした体育科教育学の授業は、15時間で体育科に関連した「即戦力としての新人教員養成」を達成しなければならない。したがって、反省的に実践し授業を改善していく過程を学生間で共有できるプログラムによって「授業実践力」を養い、経験豊富で優れた実践家である現場教師の授業を体験し、授業の組み立て方を学ぶプログラムによって「授業構想力」を育成する方法も授業方法の一つと考える。

2. 研究の目的

本研究では、小学校教員養成における他専攻学生を対象とした体育科教育学の授業に焦点を当て、実践経験豊富な現場教師による模擬授業を取り入れた授業プログラムの方法論について、実証的に検討し、今後の小学校教員養成における教師教育のあり方を具体的に提示したい。

3. 研究の方法

(1) 期日・対象

2007年から2009年前期にかけて行った「体育科教育A」の授業を対象に分析した

(2) 体育科教育A

小学校の教科教育科目であり、体育専攻学生ではなく他専攻学生（数学、国語、家政といった教科を専攻する学生）を対象に、専門諸科学と教育科目との関連において、体育科の目標、内容、学習指導法評価等の基礎的な理解と相互の関連についての研究を図り、教

科教育の理論並びに実践に関する判断力、創造力の育成を目的に開設されている授業である。筆者は、本授業を行うにあたり、「教材づくり力」、「授業構想・実践力」、「授業観察力」の獲得や育成を目指した。この3点に共通することは、よい体育授業の実現にある。よって、これを達成するために理論と実践を融合して取り組んだ。

(3) 授業計画例

2006年度後期に行った授業計画である。

授業	内 容	授業	内 容
1	ガイダンス	8	講 義
1	授業予定、模擬授業分け、模擬授業の説明、アンケート	8	模擬授業 の分析、への修正
2	講 義	9	模擬授業
2	学習の勢いを生み出すためには？	9	ハの字型ハンドボールゲーム
3	講 義	10	講 義
3	肯定的な学習の雰囲気を生み出すためには？	10	模擬授業 の分析、への修正
4	講 義	11	模擬授業
4	授業中の教師の役割、学習形態	11	ハの字型ハンドボールゲーム
5	講 義	12	講 義
5	素材と教材の違い	12	模擬授業 の分析、で変容した教師行動
6	講 義	13	講 義
6	グループで教材づくり(プレゼンあり)	13	さまざまな教材、わかるとできる
7	模擬授業	14	講 義
7	ハの字型ハンドボールゲーム	14	指導案と実際の授業

2005年度後期と2006年度前期の反省とともに、先行研究の結果を踏まえ、模擬授業で多くの学生に指導経験を保障するのではなく、模擬授業を通じて「計画」「実践」「評価」「再編成」のサイクルを学習させ、体育授業を省察できる基礎的能力を高めることに重点を置くことにした。また、2006年度前期から継続して、講義形式の授業では、高橋ら(2007)によって作成された「すぐれた体育授業を観る」のDVDによる映像をもとに行なった。このDVDは高橋らが長年にわたって体育授業研究を進め、授業のねらいが鮮明で、効果的な教材が適用され、子どもたちが意欲的に学習している、「よい体育授業」の典型例が収録されている。その内容は、教材づくり(技術篇、戦術篇)、授業の進め方(仲間づくり)、指導スタイル)、教師の教え方(指導行動、授業の約束づくり)で24のすぐれた体育授業が収められている。模擬授業形式の授業では、模擬授業と反省・討論会をそれぞれ繰り返し3回行った。また、これまでの授業と最も異なる点は、教師役の学生(以下、「授業者A」と

する)を1名に限定して行ったことである。それ以外の学生は、観察者と児童役を交互に行った。観察者役にはこれまでと同様に、期間記録法、off-task行動、教師のフィードバック行動(高橋ほか,2003)といった組織的観察法を行わせ、反省・討論会でそのデータ結果とそれから考察できることを発表させた。また、反省・討論会ではビデオで撮影した模擬授業を流し、指導案と照らし合わせながら検証し、授業計画と実際の授業のズレについて、その時の授業者Aの意思決定を語らせるとともに、筆者が良かった点や改善すべき点を説明・指摘した。

4. 研究成果

(1) 講義形式の学習

「よい体育授業とは、結局、授業の目標が達成され、学習成果の上がっている授業である」(高橋,1992,p.8)。この学習成果を探る方法は多様であるが、子どもによる授業評価もその1つである。その代表的な評価方法として「子どもによる形成的授業評価」があるが(高橋,1994,pp.235-238)、簡便性や精度については数多くの先行研究から証明されている。そこで、本授業は、「子どもが評価するよい体育授業」の観点から展開した。ここで付け加えなければならないことであるが、体育科の授業を展開する上で必要な理論や知識は以下に示す以外に多岐にわたる。しかし、新人教員に求められる資質能力や先行研究を踏まえると、まず授業を効率的に展開するためのノウハウを提示する必要があると考えた。

子どもが評価するよい体育授業では、学習に「勢い」があり、「雰囲気」がよい。「学習の勢い」とは、子どもたちが学習成果に向けてテンポよく学習し、学習に淀みがない様子である。また、「学習の雰囲気」とは、明るく

温かい雰囲気が醸し出されている様子を言う。逆に暗くて冷たい雰囲気の授業は子どもに評価されない。これらは、学年段階にかかわらずよい体育授業を実現するために必要な基礎的条件である。本授業では、「勢い」「雰囲気」の具体的特徴やそれらを生み出すための主要な条件を中心に講義した。

例えば、学習の勢いについては、運動学習場面の時間を潤沢に確保し、その中で十分な学習量(学習密度)を高めることの必要性。それを支える教師のマネジメント行動や場づくり、教材づくり、そして学習形態について具体的に指導した。また、学習の雰囲気については、肯定的人間関係や情意行動の創出、それを生み出すためのマナーの確立、賢い集団づくり、教師の相互作用行動についても映像や事例を用いながら学習を進めた。

以上の観点を中心に、6回の講義形式の学習を展開した。また、教育実習生、一般教師の授業とともに、子どもの授業評価が高かった優れた教師の授業を映像として提供し、解説を加えた。映像コンテンツによる学習効果は、教育工学分野で十分に検討され、新人教員養成における学習方法の1つとして位置づけられている。

(2) 模擬授業形式の学習

模擬授業形式での学習には、いくつかの効果期待されるが、その方法次第では、ネガティブな影響もある。そこで、次のパターンのときの効果(+)とネガティブな影響(-)について説明する。

多くの実践場面を設定し、一人ひとりに多くの経験を保証する。

+ すべての学生が経験できる。

- わずかな時間しか経験できない。

グループをつくり、グループの代表が授業を行う。

+ 指導内容、指導案、教材づくりなどグル

ープで考えることができる。

- グループ内で授業への取り組み度が異なる。

一人の学生が教師役を担い、その他の学生は生徒役・観察者役を行う。

+ 一人の学生が変容する過程をみることができる。

反省的実践の基礎を知ることができる。

- 残りの学生は経験できない。一人の学生への負担が大きい。

現職教員の授業と学生の授業を比較検討する。

+ 体育授業のイメージが変わる可能性がある。

- 多くの時間を模擬授業に費やす。準備等に多くの時間や経費を費やす。

教師教育のカリキュラムの中で強調されるのは、教師の実践的能力（performance competency）の育成ということであるが、このことはただちに教師の専門的・学問的能力（knowledge competency）の排除を意味するものではない。両者の統合カリキュラムが強く求められていると受けとるべきである。そこで、講義形式のみで行った授業の効果を検討した。

（3）講義のみの授業と模擬授業を取り入れた授業の効果

表は、講義形式で授業すべてを行った場合の効果である。

	Pre		Post		
	AVG	SD	AVG	SD	
1	教師自身が運動を師範できる	3.43	0.59	3.11	0.90
2	運動を上手にさせる「コツ」を知っている	3.24	0.89	3.55	0.70
3	運動の楽しさを教師自身知っている	3.71	0.46	3.83	0.38
4	運動のルールを知っている	3.38	0.80	3.72	0.57
5	運動が上手になるための練習方法を知っている	3.19	0.87	3.44	0.70
6	子どもに話を聞かせることができる	3.14	0.65	3.44	0.70
7	子どもの活動をコントロールできる	3.29	0.78	3.56	0.51
8	子どもに集団行動をやらせることができる	2.95	0.67	3.22	0.55
9	子どもによりよい人間関係を作らせることができる	3.33	0.66	3.69	0.32
10	子ども一人ひとりをよく把握することができる	3.42	0.59	3.72	0.46
11	運動に必要な器具や用具を教師自身が工夫できる	3.29	0.64	3.69	0.32
12	学習ノートをうまく作るができる	2.62	0.74	3.56	0.62
13	授業で使う資料をうまく探したりつくるができる	3.09	0.70	3.83	0.38
14	子どもにうまく話をすることができる	3.29	0.78	3.56	0.78
15	子どもとうまく関係を作ることができる	3.62	0.74	3.83	0.38
16	学年や体育の先生とうまく打ち合わせができる	2.95	0.59	3.44	0.51
17	施設や用具・器具の管理ができる	3.14	0.72	3.67	0.59
18	望ましいカリキュラムを考案することができる	3.05	0.80	3.56	0.86
19	あまり手間をかけなくても授業が準備できる	2.57	0.87	2.94	0.73
20	指導案がよくかける	2.67	0.86	3.34	0.78
21	体育の理念や目標についてよく理解している	2.90	0.89	3.72	0.46
22	授業の進め方についての知識を多く持っている	3.09	0.83	3.89	0.32
23	評価の仕方がよくわかる	3.05	0.67	3.83	0.51
24	自分の授業を振り返り、次の授業改善にうまく役立てることができる	3.71	0.46	3.72	0.46
25	子どもが夢中になって運動できるようにさせることができる	3.67	0.58	3.83	0.38

表から、知識に関する項目の伸びは確認できるが、実践的能力に関する項目の伸びがあまり見られなかった。

プロジェクト（他専攻学生を対象とした体育授業構想力と実践力を獲得するための授業プログラムの開発）の試みから、一人の学生が教師役を担い、その他の学生は生徒役・観察者役を行う方法が適していると考えられる。それは、一人の学生が変容する過程をみることができるからである。一方で、残りの学生は教師役を経験できない。また、一人の学生への負担が大きいこともマイナス要因である。また、現職教員の授業を模擬授業として受けることは、体育授業のイメージが変わる可能性がある。しかし、多くの時間を模擬授業に費やし、準備等にも多くの時間や経費を費やすといったマイナス面もある。

教師教育のカリキュラムの中で強調されるのは、教師の実践的能力（performance competency）の育成ということであるが、このことはただちに教師の専門的・学問的能力（knowledge competency）の排除を意味するものではない。両者の統合カリキュラムが強く求められていると受けとるべきである。

このことから、教師の実践的能力の育成と、教師の専門的・学問的能力の両者の統合カリキュラムが強く求められる。よって、3年間で検討を試みた他専攻学生を対象とした体育授業構想力と実践力を獲得するための授業プログラムは、一定の効果があると判断できる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

福ヶ迫善彦、体育科で身につけさせたい

力を保障する授業、教育研究、64 巻 2 号、
22 - 25 頁、2009 年、査読無

福ヶ迫善彦、ボールゲームにおける任地
学習場面の重要性、体育授業研究、12 巻、
36 - 44 頁、2009 年、査読有

福ヶ迫善彦、太田沙織、高田大輔、学年
はじめにおける授業ルーチンの導入に関
する研究、愛知教育大学保健体育講座研
究紀要、33 号、25 - 33 頁、2008 年、査
読有

福ヶ迫善彦、坂田利弘、授業省察力を育
成する模擬授業の効果に関する方法的
検討、愛知教育大学保健体育講座研究紀
要、32 号、33 - 42 頁、2007 年、査読有

[学会発表](計 3 件)

Yoshihiko Fukugasako、Effects of
microteaching on the observation and
reflection skills of students in
Department of Education for Teacher
Education、2008 AIESEP World Congress、
2008

福ヶ迫善彦、ボールゲームにおける認知
学習場面の重要性、体育授業研究会第 10
回大会、2008

福ヶ迫善彦、簡易ゲームによる技術・戦術
の転移の可能性 - 中学校女子バレーボー
ルの授業を対象に - 、日本スポーツ教育
学会第 27 回大会、2008

[図書](計 3 件)

福ヶ迫善彦ほか、めざそう！保健体育教
師、朝日出版社、48 - 141 頁、2010

福ヶ迫善彦ほか、体育科教育学入門、大
修館書店、98 - 103 頁、2010

福ヶ迫善彦ほか、保健体育科教育法、大
修館書店、54 - 57 頁、2009

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

[その他]

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

福ヶ迫 善彦 (FUKUGASAKO YOSHIHIKO)
愛知教育大学・教育学部・講師
研究者番号：20398655

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし